

# 『想起の音楽——表現・記憶・コミュニティ』

アサダワタル[著]、水曜社、2018年

[評者]

伊藤順之介

ITO Junnosuke

芸術を用いた地域振興や社会的包摂の実践を紹介する書籍は少なくないが、しばしば不満に思われることが二つある。まず一つに、そのような実践の考察が、芸術の社会的意義を強調する観点からの記述にとどまっていること。つまり、それが芸術としてどのような営みなのか、という美学的観点からの記述が不十分なことである。例えば、市民参加型の芸術祭を取り上げる書籍では、社会的意義を強調する観点から、作品の制作・鑑賞が人々をエンパワメントしたり、連帯感を生み出したりする効果がある、といったことが論じられる。一方で、その作品自体が何を表現しているのか、もしくはそのような作品の制作・鑑賞行為における創造性・批評性とは何か、といった記述は薄くなりがちだ。しかし、このような美学的観点から論じることによって、作品やその制作・受容行為を、美術史や美術批評の文脈のなかに位置づけていくことができるのであり、それは特定のアーティストによる作品だけが権威づけられてしまわないようにするためにも、必要な作業である。また、いま一つに、研究対象が大規模なアートプロジェクトに偏重し、より日常的な場面に遍在する芸術実践を対象としたものが少ないことも挙げられる。音楽研究の領域においては、ロックフェスティバルなどは取り上げられやすい一方、小学校での歌唱やカラオケでの音楽行為が対象となることは少ない。まさに以上二点の不満に込められているのが、本書である。

本書において論じられるのは、「音楽による想起がもたらす、創造的なコミュニティ生成」(3頁)である。学校や地域といったコミュニティのなかで、過去に親しんだ音楽を聴き、思い出された記憶を語り合う。音楽を通じてこのようなコミュニケーションの内実を筆者は描き出そうとする。ここではコミュニティ内の人間関係及び楽曲にまつわる記憶にどのような変化がもたらされるのか。また、このような営みを積極的に評価できる視点とはいかなるものか。著者はこれらの問いと向き合うのに必要な事例として、学校でのワークショップやカラオケスナックで開かれる大学の同窓会を取り上げる。そして音楽社会学、美学、文化研究、コミュニケーション

研究といったさまざまな学問領域を横断しながら、記述を重ねていく。

内容の詳述に入る前に、まずは著者の略歴を見ておきたい。本書執筆の動機には、著者の経歴が深く関わっており、それが本書の特徴の一つになっているからだ。2000年代初頭からミュージシャンとして活動を始めた著者は、その後、全国各地でアートプロジェクトによるコミュニティデザインに活動家として携わり、それは現在も継続して行われている。その傍ら、文筆家として、活動の経験を土台に本や論考を著してきた。ミュージシャン、活動家、文筆家とさまざまに活動を展開してきた著者であるが、自身の活動の軸である音楽を論じる手法としてとったのが、学術研究である。著者は、2013年に滋賀県立大学大学院環境科学研究科の博士課程に入学して、本書の基になった博士論文を2016年に提出する。研究という手法をとったのは、音楽が「自分と近すぎて、あえて『研究』という枠でも使わないとどう書いたらいいかわからな」(9頁) だったからだという。著者は音楽を、研究対象として、いわば自身から切り離して見ていく方法をとることによって、論じることができた。その成果である本書は、実践に携わっていた著者が、自身の活動を研究対象として相対化しながら記述したところに、一つの特徴がある。自身の実践を学術的に位置づける試みは、本書執筆後の著者自身の活動にフィードバックされており、成功していると言える。

構成を見ていこう。本書は全部で6章からなる。まず第1章、第2章では、本書のキーワードである音楽と想起という二つの概念がそれぞれに取り上げられ、先行研究の知見が整理される。そこから著者は、どちらの概念においても、従来取り上げられることの少なかった面に光を当てる。日常的な場面で他者との関係を構築していくために「使用」(35頁)する音楽、また、想起がどのようになされるかという「想起の仕方」(70頁)が焦点となる。ここでの著者の目的は、音楽の「使用」や「想起の仕方」という着目点の創造的・批評的な機能を理論化していくことである。続く第3章、第4章では、具体的な事例に即した分析が展開される。第3章では、著者自身が関わった学校でのワークショップが二つ取り上げられる。一方で、これらの事例が予算の確保された「イベント」(107頁)的なものであることから、第4章では更なる日常的な事例として、カラオケスナックでの大学の同窓会における校歌の歌唱が取り上げられている。スナックでは、経営者(ママ)という、本来のコミュニティ(学校の同級)の外に位置する人間が積極的に関わっていく様子が観察される。著者は、ママのような第三者的立場の人間を「メディエーター」(136頁)と位置づける。メディエーターの存在によって、コミュニティ内のメンバーの想起と対話が重層化し、コミュニティがより活発化していくという。以上の議論を受けて、第5章は、

再び想起と音楽両方の概念の考察にあてられている。本書の結論をごく簡単にまとめると次のようになる。コミュニティ内で共有された音楽は、そこにいるメンバーの想起と対話を促す。それは他者との関係を構築、更新する社会的経験であるとともに、美的経験として楽曲自体に新たな意味づけを加えるものである。締めくくりとなる第6章では、「音楽×想起によるコミュニティデザイン」(174頁)の展望として、著者が関わる震災復興のアートプロジェクトが紹介される。少子高齢化や過疎化によって地域コミュニティが衰退し、記憶を語る場が失われつつある今日において、アーティストや活動家の果たしていける役割とは何か。コミュニティデザインにあたって、同質性や物理的な凝集性に閉じない、開かれたコミュニティ観を持つことを著者は提案している。

第4章からの議論を読んでわかったことがある。タイトルにこそ示されないが、本書全体に通奏低音として響くキーワードとなっているのは、メディアエーターという語である。あるものと別のものをつないで、活動を活発化させていく媒介者・触媒となること。それはワークショップなどの実践において、アーティストや活動家がとる姿勢を意味するだけにとどまらない。本書の研究手法が事例分析と理論的考察を往還するものであること、また芸術の社会的・美的価値の両方を同時に論じていること、そして著者自身が実践と研究をつなぐ活動をしていること。あらゆる意味において、「メディアエイト」することを試みる著者の姿勢が、本書には貫かれている。また、そもそも音楽や記憶の問題を論じるにあたって、現代ではそれらがメディアに下支えされていることを抜きにはできない。本書において論じられる主題と選ばとられた論述形式の間には、必然性が感じられる。主題と形式の一致という点において、本書は「作品」としての強度を確かなものにしていく。いわば良質なメディアとして、実践や研究に携わるものいくつかの示唆を与えてくれる一冊である。